

平成 30 年度実務実習教科担当教員会議 議事録

1. 開催日：平成 31 年 3 月 20 日（水）
2. 場 所：慶應義塾大学薬学部 芝共立キャンパス 1 号館地下 1 階 マルチメディア講堂
〒105-8512 東京都港区芝公園 1-5-30
3. 出席者：81 名
4. 本会議
 - (1) 開催の挨拶 名城大学 野田幸裕
 - (2) 第 103 回 薬剤師国家試験問題検討委員会報告（配布資料）
報告 北海道科学大学 佐藤秀紀 先生
 - (3) 講演「実務実習において学びたい医療安全」（配布資料）
演者 名古屋大学医学部附属病院 梅村 朋 先生
 - (4) 講演「大学主導型の実務実習の在り方を考える」（配布資料）
演者 帝京大学 小佐野博史 先生
 - (5) 次回開催案内 名城大学 野田幸裕
 - (6) 閉会の挨拶 名城大学 野田幸裕

5. 会議報告

(1) 開催の挨拶

本年度の委員長である野田幸裕（名城大学薬学部）による開催の挨拶後、本会議の開催時期について説明があった。すなわち、昨年度実施した本会議の開催時期のアンケート結果を踏まえて今後、日本薬学会年会の前日に開催する。また、薬学臨床系教員連絡会議と共同して実務実習教科担当教員会議を開催するように調整したが、本年度は実現しなかったことが説明された。

(2) 第 103 回 薬剤師国家試験問題検討委員会報告

第 103 回 薬剤師国家試験について、実務系の問題検討委員会の北海道科学大学 佐藤秀紀 委員長から第 103 回 薬剤師国家試験問題検討委員会（実務部会）および薬剤師国家試験問題検討委員会での報告書に基づいて説明と解説がなされた。全体として妥当な問題が多く、平易な問題から難易度の高い問題とバランスよく作成されていたと報告された。複合問題では、情報不足と表現が曖昧な問題や、ガイドラインに基づいていない症例もあったが、実臨床に即した問題解決能力や実務実習で学んだ知識を問う問題が多く、実践力が重視されていた。参加者から、情報不足と表現が曖昧でも正解を導きだせる問題であれば、疑義とする必要はないのではないか、どの程度の不適切な問題が取り上げられるのかなどの質問があった。疑義の程度については今後の課題であるが、提案した疑義が国家試験問題に反映されなくても、根気よく問題について意見やコメントすることが、適切な問題への改善に繋がると回答された。第 104 回薬

剤師国家試験からは以下のすべてを満たし、禁忌肢の選択状況を加味することが合格基準となっていることが、学部教育にどのように影響を与えるかも課題となる。①問題の難易を補正して得た総得点について、平均点と標準偏差を用いた相対基準により設定した得点以上であること。②必須問題について、全問題への配点の70%以上で、かつ、構成する各科目の得点がそれぞれ配点の30%以上であること。

(3) 講演「実務実習において学びたい医療安全」

「実務実習において学びたい医療安全」と題して、名古屋大学医学部附属病院 梅村 朋 先生より、医療安全における薬剤師の役割として、①薬剤師と医療安全、②名古屋大学医学部附属病院における活動、③実務実習に期待することについて発表があった。実務実習に期待することとして、①医薬品使用のすべての工程に注目する、②医薬品の不適切使用により患者に重篤な後遺症を残したり、失う場合もあることを知る、③有害事象発生時の対応ができる、④「薬」のスペシャリストとして対応する、⑤可能性を考える力をつける、⑥患者・家族も医療チームの一員であることについて、医療現場における具体的な事例を踏まえて説明がなされた。医療現場で起きている医療事故の事例と対策に関する事前学習を強化して、実習期間を通して安全管理を意識して実践できるような大学教育が重要である。実務実習中に体験・発見したインシデント、アクシデントの事例や蓄積されたインシデント、アクシデント報告などをもとに、その対策について討議や考察し、提案できるような実務実習を実施する必要がある。大学の事前学習などで、こうした具体的な事例を提示した講義がどれくらい実施されているか質問があり、次回までにアンケート調査などを行って回答することとなった。

(4) 講演「大学主導型の実務実習の在り方を考える」

「大学主導型の実務実習の在り方を考える」と題して、帝京大学 小佐野博史 先生より、次世代を担う薬剤師を育成する責務は、大学だけではなく、現職の薬剤師が担うところが大きい。実習の準備を進めていく上で、「大学としての主導的な役割」とは何を意味するか、どのような観点が重要であるのかという点について講演があった。2018年度は、実務実習の円滑な実施体制の整備のため、薬局・病院・大学などの関係者の努力により、一定の水準で実習可能な体制が構築されてきていることが報告された。しかし、未だ一枚岩ではないと感じることが多いため、今一度、大学や施設が、大学主導とはいかにあるべきなのか、現場との連携はどのようなことなのかを考えてみるのが重要である。そのため、改訂モデル・コアカリキュラムに準じた円滑な実施ができていないか、再度、議論する機会が必要であると提案された。

(5) 次年度以降の開催について

名城大学 野田幸裕 委員長から、次年度の委員長は北陸大学 石川和宏 先生が担当し、野田幸裕 委員長は副委員長を担当することが提案され、承認された。次回も日本薬学会年会の会期前に開催する予定であり、薬学臨床系教員連絡会議と共同開催できるように調整していくこ

とが説明された。

次年度開催予定：日本薬学会第 140 年会 2020 年 3 月 25 日～28 日 京都近辺

次年度委員長：北陸大学 石川和宏 先生

次年度副委員長：名城大学 野田幸裕

(6) 閉会の挨拶 名城大学 野田幸裕

以上